



戦後80年 自分たちがつくる未来



題字 井口 文章
再刊 第496号
印刷・発行 錦城高等学校新聞委員会
編集室 2025

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面…夏期講習 錦城で学んで考える「平和」
小平市ワークショップに参加
二面…西東京市講演会で得る学び
パンフキン爆弾ってなんだろう？

「戦争」を多摩地域から考えて

今年は1945年から80周年という節目の年。錦城で行われた夏期講習や、近隣地域のイベントを取材した。戦後80年について、また戦争当時を考える機会になった。それぞれの取材の様子をお届けしたい。

肌で感じる80年前 「広島今昔物語」

映像作品を通して考える

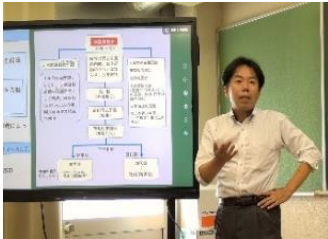
8月23日(土)の5、6限に行われた社会科の森本慶先生による夏期講習「広島今昔物語」では、まず18年前にフジテレビで放送されたドラマ『はだしのゲン』前編を視聴した。『はだしのゲン』は中沢啓治さんが自身の被爆体験を基にした漫画で、戦中戦後の広島を少年が生き抜こうとす



『はだしのゲン』知っている人ー！

歴史の「なぜ」を考える「戦争と平和」

8月21日(木)・22日(金)3、4限に行われた社会科の石井智先生による夏期講習「歴史探究『戦争と平和』」では、なぜ日本が戦争を止められなかったのかを考えた。張作霖爆殺事件、満州事変などの背景は、昭和恐慌などによる経済の悪化が原因だと石井先生は解説する。



「なぜ日本が戦争を止められなかったのか」

映像なども視聴して、すでに当時日本の勝利はかなり難し

いことが予測されていたが、それにもかかわらず開戦を選んできた理由は軍部にだけなく国民、つまり当時の世間の空気が開戦ムードであったことにある、と石井先生は説明した。実際、開戦することを知られた時の当時の人々の反応は肯定的なものが多かったという。日本の敗戦後、1945年に国際連合が発足するが、安全保障理事会の常任理事国は拒否権を保有

している。授業の最後で石井先生は、現在の国際連合の「安全保障理事会」は機能しているか、と生徒に問いかけた。石井先生に授業後、講義の目的について伺った。石井先生は、この授業を通して「なぜ戦争に負けたとわかっていても開戦してしまったのか？政府や国民が軍に騙されていたからというだけでなく、それ本当なのか？」について、考えてみて

「はだしのゲン」を見てとて

夏休み前までは「戦争」と聞いても、自分とすぐく距離があるように感じていた。しかしこの夏、取材で直接被爆者の方とお会いしたり、実物の爆弾などに触れたりする中でそうではないことを知った。お話を伺った西東京市郷土資料室文化財指導員の渡邊明徳さんは、「戦争遺跡がどんどん減っていつかなくなってしまう今、戦争を体験していない人が、どうやって次へ引き渡していくのか大切だと思います」と話してくれた。取材した方々の多くが口にしたのは、私たち若者が戦争を知ることの大切さ、それをつないでいくことの責任だ。取材で参加した小平市小川公民館のワークショップでは、講演後中日新聞の記者さんから取材を受けた。講演を受けこれからの行動についていかに加えて、新聞委員

平和を考えるきっかけに

読書で感じる戦争

むらさき草

受け継がれる戦争の記憶

小平市「戦後80年・戦争と平和について考えよう」に参加してみた

8月14日(木)、小平市小川公民館でジュニア講座「戦後80年・戦争と平和について考えよう」が開催された。取材依頼に快く応じていただき、小中高生ら計8名が参加した講座に編集部も参加した。まずNPO法人BRIDGE FOR PEACE(以降BFP)のシャープ茜さんが講演を行った。BFPは、戦争体験者の記録映像などを生かしたワークショップなどを行っている。設立のきっかけは、代表の神直子さんが大学生の時に訪れたフィリピンのネグロス島で、夫を日本兵に殺されたという女性から言われた「何で来たんだい！日本人なんて見たくなかった…」という一言だという。以来、BFPでは元日本兵の方々の言葉をフィリピンへ届ける活動を行っている。シャープ茜さんはBFPの講演に初めて参加した際、戦争中にフィリピンを侵略したという歴史をそれまで知らなかったことに責任を感じたそう。その経験からフィリピンや日本で戦争の体験者の証言を聞き、戦争を知らない世代に伝えるBFPの活動を続けている。



「語り継ぐのは戦争を知らない私たち」というテーマでワークショップが開催された

記録映像 日本からフィリピンへ

講演では、フィリピンの方々と元日本兵の方々の言葉が記録された映像を視聴。50年経っても夫の遺体が見つからない、と悲痛な表情を浮かべる女性の話から始まった映像。畑を焼かれた、親族が銃剣で刺され亡くなったなどのフィリピンの方々の話や、非国民だと指をさされるのが怖かった、父親が亡くなる間際まで悔んでいたなどの元日本兵や家族の話が記録されていた。シャープ茜さんは、戦争の被害者も傷ついているということや当時の兵士の思いをフィリピンへ届けたい、という思いで活動を続けていると熱く語った。ワークショップでは、「もし、あなたがフィリピン人だったら/当時の日本兵だったら…」という問いを考え、お互いの考えを交換した。もしフィリピン人だったらという問いに、市内の高校2年生の男子生徒は「死んでしまった人は帰ってこないの、私は赦せません」とのこと。また参加者の保護者は、「未来に一步踏み出すためには、赦すっていうか、分かり合っていくしかないと思います」と話した。何をされても赦せない、いくら反省しても殺された気持ちは変わらないなどの意見も出た。もし日本兵だったらという問いに対しては、市内の女子小学生が「普通の喧嘩は話し合いをすれば済むのに、なぜ話し合いをしないのかと思います」と武力ではなく言論での解決方法をすべきだったと考察。また、ある小学生男子は「人を殺す以前にそもそも戦争をしなければ、だれも悲しまない」と意見を交わした。

シャープ茜さんにインタビュー 「語り継ぐ大切さ」

講演後、シャープ茜さんに話を伺った。BFPの活動では、取材を申し入れても断られるなど、取材がいつも上手いく訳でもなく、フィリピンの戦争体験世代ではやはり日本を許せないという方もいたという。フィリピンでは家族の絆が強く、家族内で体験がよく語り継がれることもあるため、子どもたちにも当時の戦争が鮮明に受け継がれるそう。学校でも、日本よりも戦争について学ぶ時間が多いのではないかと。そのような中、視聴した映像には元日本兵の思いを聞いたフィリピンの方々の「彼らがしたことを赦そうと思います」という声があった。色濃く記憶を受け継ぎ続ける人々のその一言には、とても複雑な響きを感じられた。関心を持つことが大切だと話すシャープ茜さんは、「加害の歴史を想像してください。戦争は被害者にも被害者にもなり得ます。戦争を知った皆さんも語り継いでほしいです」と高校生にメッセージをくれた。

地元にもあった空襲～「パンプキン爆弾」を知っていますか

西東京市平和を考える講演会・解説板除幕式を取材

8月2日(土)、西東京市柳沢公民館で「戦後80年に平和を考える講演会」が開催された。本講演会後、西武新宿線西武柳沢駅近くの「しじゅうから第二公園」で戦争被害解説板の開設、それに伴う現地見学会・解説会も行われ、編集部も参加させていただいた。

多摩地区の空襲について

公民館での講演の前半は、太平洋戦争時の西東京エリアへの空襲についての話であった。講師の1人である法政大学中学高等学校教諭の牛田守彦先生は、武蔵野の空襲と戦争遺跡について研究をされている。牛田先生によると、西東京市(当時の保谷市・田無市)は戦時中何度も激しい空襲に見舞われていた。隣接する武蔵野市には、中島飛行機武蔵製作所(以下中島飛行機)という飛行機のエンジンを作る軍需工場があり、その工場を狙って1トン爆弾などの爆弾がいくつも落とされた。そんな中、1945年7月29日に



講演者の西田さん、西東京市長、教育長と一緒に記念撮影

多摩地区の空襲について

太平洋戦争中、計122回もの空襲を受けた東京。多摩地域も多くの空襲被害を受けている(*1)。多摩地域への主な空襲は、1944年11月から1945年8月までの約10ヵ月で、武蔵野町の中島飛行機武蔵製作所や立川市の航空機関連工場・飛行場などに対する爆撃が続いた。八王子市では1945年8月2日、市街地が焼き払われる八王子空襲が行われた(*2)。多摩地区の空襲では西東京市の被害が多く、同期間で計17回の空襲があった(*3)。小平市にもB29による計7回の空襲があった。最初の空襲は1944年12月3日、現在の花小金井駅東方に爆弾が落とされた。線路二か所が破壊されたほか、陸軍経理学校内の敷地や町内の畑地が被弾している(*4)。

参考資料

- *1 総務省HP「東京都における戦災の状況」
- *2 東京大空襲・戦災資料センターHP「東京大空襲について」
- *3 西東京市令和元年度活動記録(No.19)「非核・平和はみんなの願い」
- *4 小平市史編さん委員会編集『小平市史近現代編』



米軍の中島飛行機周辺の写真
米議会図書館蔵。牛田先生提供

模擬原爆の記録を残す

講演の後半は、「西東京に落とされた模擬原爆の記録を残す会」の西田昭司さんが原爆投下の裏話などをお話しされた。同会は2009年から模擬原爆関連の事実を伝える活

動を続け、模擬原爆落下・爆発地点に「説明板」を設置することを目標としている。西田さんは、原爆攻撃について当時の大日本帝国の陸・海軍は情報を含めかなり掘りこんでいたのではないかと語る。海軍少将が父であった女性に話を聞いたところ、広島市の海軍病院にいた父が8月5日に部下に連れ出されて四国に渡り、難を逃れたのだという。その女性は「海軍はきつと原爆投下を知っていたんじゃないかと思うんです」と言っていたそうだ。これについて現在では確認する方法がないが、原爆投下の予告を聞いたという証言はたくさんあると西田さんは話した。

講演会の最後は西東京市の



多くの人が訪れた講演会



講演後に解説していただいた

身近な戦争遺跡を大切に

西東京市郷土資料館で知る 近隣地域の80年前

錦城から自転車で約15分の西東京市西原総合教育施設の2階にある西東京市郷土資料館では、8月31日(日)まで「身近にあった「戦争資料」」が展示されていた。8月14日(木)、編集部は西東京市郷土資料室を巡り、文化財指導員の渡邊明徳さんに話を伺った。

西東京市(戦争当時は保谷市と田無市)は多摩で最も空襲を受けた地域。戦闘機の隼や零戦などのエンジンを製造していた東洋1の規模を誇った航空工場、中島飛行機武蔵野製作所が近くにあり、またその下請けの関連工場も多く存在したためだ。特に1945年4月12日の空襲では、中島飛行機工場をそれた1トン爆弾が西東京市の広範囲に散らばり、100人以上の犠牲者が出たと話してくれた。現在の田無駅北口では、近くに落ちた爆弾によりコンクリート製の防空壕が崩壊。避難していた女性子どもを中心に、30人の方が生き埋めとなり亡くなった。この日のことを忘れずに、繰り返さないために、現在田無駅北口ロータリーに平和のリングが設置されている。渡邊さんは平和のリングのそばで空を見上げ当時を想像することが多いと言い、避難しようとして田無駅付近から青梅街道まで飛ばされてしまった子どもや、飛ばされて木の枝に引っかかった女性の着物などが目に浮かぶそうだ。



「戦争の悲惨さを知ってほしい」

地域の戦争を伝えるためには

中島飛行機工場で製造されたエンジンは試運転のためにトロロッコで現在の住友重機械工業 田無製造所まで運ばれた。合格判定を受けたエンジンは中島飛行機工場に戻ってきた後、武蔵境駅までトロロッコで、その後鉄道で群馬県太田市に運ばれ機体につけられた。しかしそんな方法でエンジンを運べたのはたったの半年。アメリカの偵察機により地図に起こされ、レールを狙って爆弾が撃ち込まれ壊れてしまった結果、トロロッコを使い運ぶことが難しくなり、その後はトラックで運ぶようになった。解説版を指さしながら、「このようなところからも、戦時の日本とアメリカの力の差が読み取れる」と渡邊さんは解説してくれた。

また資料館には、2年前の2018年7月27日に田無小学校で発見された武器の一部も展示されていた。これは、管理棟の移設工事のために校庭を掘り下げていたところ、地下から発見されたものだ。宿場町として栄え、当時北多摩の中心の立ち位置だった田無。渡邊さんによると、終戦後、三鷹、小平、清瀬など近隣の地域で

訓練用として使用されていた武器を田無警察に集めるよう、GHQより指令が入り、集められた1400挺もの鉄砲などが、田無小学校の爆弾によって空いた深さ1メートルの穴に入れられ、ガソリンをかけ燃やされていたという。だんだんと戦争遺跡が開発などで減ってきてしまっている寂しようにする渡邊さん。レジュメを手に取り、「レジュメの表紙にあるように『戦争の悲惨さや平和の大切さ』を地域の歴史から考えよう!』と高校生にも伝えたい。身近なところから戦争について考えて、記憶をつないでほしい」とメッセージをくれた。身近な場所にも戦争を考えるきっかけが残っている。地域に残された遺跡に目を向け、先人の思いにこたえていきたい。



戦争被害を解説してくださる渡邊さん

掘り出された銃剣の一部

訓練用として使用されていた武器を田無警察に集めるよう、GHQより指令が入り、集められた1400挺もの鉄砲などが、田無小学校の爆弾によって空いた深さ1メートルの穴に入れられ、ガソリンをかけ燃やされていたという。だんだんと戦争遺跡が開発などで減ってきてしまっている寂しようにする渡邊さん。レジュメを手に取り、「レジュメの表紙にあるように『戦争の悲惨さや平和の大切さ』を地域の歴史から考えよう!』と高校生にも伝えたい。身近なところから戦争について考えて、記憶をつないでほしい」とメッセージをくれた。身近な場所にも戦争を考えるきっかけが残っている。地域に残された遺跡に目を向け、先人の思いにこたえていきたい。

パンプキン爆弾とは

太平洋戦争中に日本全国、原爆投下訓練に使用された49か所に落とされた模擬爆弾「パンプキン爆弾」という名前がつけられた。この爆弾は投下訓練の他に投下時のデータ収集も目的としていた。それだけならば爆薬を用いずとも投下に必要ないデータは採れる。しかし、パンプキン爆弾には実弾が用いられた。講演会での牛田先生の資料によると、実弾が用いられたのは爆撃手たちの士気をあげるためなのだという。また、模擬原爆という名の通り長崎に投下された原爆(原子爆弾)と同形状に作られており、核が入っていないことや起爆方法以外はほとんど同じだという。講演会が行われた柳沢公民館には、250キロ爆弾の破片が展示されている。皆さんにも、西多摩地域の当時を感じて、実際に足を運んでみてほしい。



柳沢公民館に展示されている250キロ爆弾の破片



除幕式が行われた

解説板除幕式に同行

講演会の後は、公民館から歩いて5分、西武新宿線西武柳沢駅近くにある「しじゅうから第二公園」に移動し、模擬原爆の被害を伝える解説板の除幕式が行われた。解説板には、公園付近にパンプキ

解説板の後は、公民館から歩いて5分、西武新宿線西武柳沢駅近くにある「しじゅうから第二公園」に移動し、模擬原爆の被害を伝える解説板の除幕式が行われた。解説板には、公園付近にパンプキ